芸術への執着と妹の献身

―武者小路実篤『その妹』におけるジェンダー意識―

楊　琇媚

はじめに

『その妹』は大正三年十二月三十一日から執筆され、翌年二月四日に脱稿、同年三月号の『白樺』に発表された戯曲である。[1] そして、九月に洛陽堂より刊行された単行本『向日葵』に収められた。発表当時から好評だったため、後に、武者小路自身が「僕の出世作」[2]と呼んでおり、戯曲家として文壇にデビューした出世作となっている。また、上演回数からみても、武者小路の戯曲作品の中では最も人気の高い作品である。[3]

武者小路は『その妹』の創作動機について、自伝小説『或る男』（百七十七）の中で、次のように言及している。なお、文中の彼とは武者小路自身のことを指す。

> 画家が盲目になる。自己を生かす道を新たに考へなければならない。（中略）それで生きる道をやつと見出したのが文学である。そしてそれには一人の助手が必要で彼はその助手としてよき妹を与へたが、そこから事件が発展しだした。彼は人間がどんなに苦しくも生きやうとするその力がかきたかつた。よき目をもつた画家が目を失ひ、よき妹をもつてゐた画家が妹を失ふ。そしてなほこの世にしがみついて、更に生きやうとする。其処がかきたかつた。しかし彼はその妹をいやな男と結婚させたくなかつた。しかし運命ととつくんで、血みどろになつて、それでも勝てない事実はこの世にも多くある。[4]

引用が少し長くなったが、作者自身の創作意図が最もよく表現されており、一目瞭然である。天才画家と称される野村広次は戦争で全盲になったが、新たな「自己を生かす」道である小説家として、そのよき理解者である妹とともに苦境の中で懸命に生き抜こうとしていくのである。そして、すでに一人前の小説家となっていた西島の無償の協力を得、ようやく微かな希望が見えるようになるが、現実はあくまでも残酷で、広次兄妹を容赦なく限界まで追いつめていく。結局、広次兄妹は運命に勝つことができず、妹の静子が犠牲になるという形で悲劇の結末を迎えるのである。こうした悲劇の結末という作品の状況設定から考えると、この作品は、楽観的かつ「向日的」な作家である

と言われてきた武者小路にしてはリアリティーに満ちていて、諸作品の中、異色の地位を占めていると言わざるを得ない。そして一見すると武者小路は客観的に登場人物たちが生きている現実の世界を見つめており、『お目出たき人』（明治四十三年）や『世間知らず』（明治四十五年）を執筆した頃の過去の武者小路とは異なり、現実の厳しさを十分に作品に反映できるようになっていると感じられ、彼の成長を評価できるようにも思われる。また、従来の論も、上述の創作動機に即し、リアルな情況設定や主人公たちの生き方から、本作品に高い評価を与えている。[5] けれども、こういった結論はいささか短絡的だという印象を払拭できない。それゆえ本稿では、作品中に見られる戦争と金権社会といった状況設定の現実性に着目しながら、先行研究に見落とされがちだった劇の作り方をも考慮し、主要登場人物を解析することによって、作品のリアリティーを検討することを目的としたい。さらに、その結果を踏まえて、武者小路における女性意識についても考察することとする。

一　作品における状況設定の現実性

広次の不運の外因は一つは戦争であり、もう一つは経済的不如意であると大津山国夫氏は指摘している。[6] こういった戦争と金銭の問題により広次兄妹は窮地に立たされているのであり、悲劇を生み出した最大の原因となっている。

大正三年七月に第一次世界大戦が始まって以来、武者小路は文学を通じて色々な場で自分の反戦思想を主張している。[7] 主人公の広次が戦争負傷者として描かれている『その妹』も、その一つの代表作としてあげられるのである。そして作品中、広次が演説し妹静子が筆記する場面の殆どが、国家批判や反戦思想を主張する態度の表れだと思われる。一つの例として以下の広次の言葉を引用しておく。

私は盲目です、戦争で盲目になつたのです。（中略）私は画かきです。私の希望は画をかくことによつてのみ満たされると思つてゐたのです、私の運命は私の画が進歩する事によつて開けてゆくと思つてゐたのです。（中略）ある展覧会に出した私の画は私の尊敬する批評家から可なり程度の高い賞め言葉すらもらつたのです。かう云つても諸君は知れたものだとお思ひになるでしやう。しかし仮りに私を有望な人間だと思つて下さい。有望な人間がもう一歩と云ふ勝利の自覚を得た時召集されて、戦争に行つて盲目になつて帰つて来たと思つて下さい。（中略）私は大の非戦論者でした。人を殺すことは嫌いな男です、又人に殺されることはこの上なく嫌いな男です。私は国家が戦争をしたことにも不服だつたのです、（後略）（第一幕）

広次は両親を失い、妹と叔父の家で居候している。画を描くことを唯一の希望としていた彼は、いつか有望な画家になって、妹との運命を切り開いてゆこうと望んでいたが、運命に翻弄され、戦争に召集されて、そして失明するに至ったのである。よい目を持つことが画家

にとって最も大切なことであることは言うまでもない。目を失ったことは広次にとって致命傷であり、一番の災いであったと考えられるため、彼の衝撃が大きかったことも容易に想像がつく。だが、広次兄妹への残酷な運命はこれだけでは終わらない。静子への強引な縁談や唯一の金銭援助者である西島の家計の苦境、そしてやがて静子が西島の自分への恋心を知ることによって、破局を招くに至るまでの、様々な災いが次から次へと広次兄妹に襲いかかってくるのである。

広次兄妹のこうした災いの根本的な原因は、戦争というものにほかならなかった。それゆえ、広次は当然ながら戦争の被害者であり、反対者でもある。そしてこの作品からは、作者の反戦意識をも明白に読み取ることができる。実際、『その妹』は昭和十四年に「安寧を紊る廉」という理由で、広次の演説の一部分が削除処分を受けているのである。削除された部分は広次と静子の対話に書き換えられ、「大の非戦論者」などの反戦用語が殆ど消されてしまった。こうして「削除済」の『その妹』は、昭和十四年九月に改版・削除版として出版されたのである。

もう一つの災いの原因は金権である。叔父の会社における社長の息子三郎は静子の美貌に惚れて、彼女をもらいたがっている。叔父の仕事を守るため、三郎が道楽者であることを知りながらも、叔母は広次兄妹に強引に縁談を勧めようとする。さらに、叔父は静子を社長の家である相川家に連れていき、風呂に入れ、三郎の母が体格検査を行い、三郎に裸体を見せるなどの一連の策略を巡らしたのである。広次は相川や叔父夫婦に与えられた恥辱に憤慨しながらも、叔父の家の食客であるため、この恥に対して耐え忍ぶことしかできなかった。ここでは、金持ちは強者であるという、いわゆる弱肉強食の社会構造が示されている。

野村は金をとることは一寸出来ないからね。叔父さんが職を失なつたら、それも自分の妹の為に職を失なつたのだからね。もう叔父さんの世話にはなつてゐられないからね。金がなければ今の世には生きてゆかれないからね。（西島・第二幕）

今の世は実際金の世の中だ。金がなければどうすることも出来ない。（高峯・第二幕）

何しろ金の力と云ふものがさう云ふ所まで跋扈するのは癪にさわるよ。人の一生に無遠慮にさわつてくるのだからね。（西島・第二幕）

確かに、金がなければどうにもならない世の中で、叔父は金持ちの相川にとっては奴隷のような存在である。一方、厳しい現実のもとで、貧困な広次兄妹は縁談を承知しなければ叔父の家から出なければいけなくなり、その場合、広次の小説が世間に認められるまでは、西島の援助を受けざるを得なくなってしまう。いずれにせよ、金がなければ自分の意志で人生を歩んでゆくことすら困難なのである。金権社会の中で金銭に苦しんでいる登場人物の姿を描き出した作者の意図に

は、このような社会に対する批判の眼差しが向けられていることが窺えよう。

武者小路が、このような戦争負傷者及び金権社会の被害者たちの苦悩を描写していることから、彼が現実の世界を客観的に直視することができるようになっていたことが窺える。このように、広次兄妹の運命を左右する要因を重層的に描写することによって、この作品はより現実性を持つに至っている。

先にも少し触れたが、悲劇性を持つこの作品は過去の作品と比べてかなり現実的である。たとえば、武者小路の「第三の恋愛」を素材とした『お目出たき人』は失恋小説でありながら、失恋の悲しみを匂わせない物語である。主人公「自分」が見初めた女性、鶴に何回もの求婚を繰り返すが、やがて彼女は人妻になってしまう。にもかかわらず、「自分」はまもなく悲しみから立ち上がり、「鶴が『妾は一度も貴君のことを思つたことはありません』と自ら云はうとも、自分はそれは口だけだ。少くも鶴の意識だけだと思ふにちがいない」[8]と思いながら、鶴への恋心を自分の世界で継続させていくという空想的な物語であった。

また、妻房子との交際の経緯を素材にした『世間知らず』は、主人公「自分」が、一方的に近づいてきたC子と交際するようになり、C子を疑ったり信じたりするという不安定な時期を経た後、世間を気にしてばかりいた「自分」が、その代表とも言える母親に反抗することができるようになり、恋愛が成就されるに至るという物語である。このような武者小路の典型的な楽観主義的作風を持つ両作品と比較してみると、『その妹』が異色な作品であることが明白となるであろう。

二　登場人物の非現実性（理想性）

作品の状況設定は現実性を有しているものの、それとは対照的に登場人物はかなり非現実的だという印象が否めない。以下、主要登場人物である広次、西島、静子の人物像を中心に見て検証していきたい。

1　広次について

1―1　芸術への執着

前述した広次の演説の中から、戦争に行く前の彼が世間からかなりの評価を与えられていた画家であったことが分かる。そして、同じく画家であり、すでに世に認められた有名な画家である高峯も彼のことを次のように評している。

> 徴兵にとられて出て来た時の勉強と来たら大したものだつた。何時行つても画をかいてゐた。（中略）目さへやられなければ今時分可なりの仕事をしてゐたらう。僕も絶えず野村に刺戟をされたらう。今の僕よりも大きい仕事を少しはしてゐたかも知れない。思へば戦争と云ふ奴は恐ろしい。（第二幕）

以上の引用から、高峯は以前の広次の画に対する才能と精進を畏敬し、彼をよきライバルとして見ていたことが窺われる。そしてそれ

は、広次が画家として良い才能を持っていたことを一層証明しているように思われる。しかし、目を失ったことによって広次の画家としての成功は殆ど不可能に近いものとなってしまい、彼は新たな希望である小説家として再起しようとする。ここで、天性の芸術家として造型された広次が、画家と同様な芸術家の仕事である小説家の道を選択したのは、彼にとって必然的であったというより、むしろ作者である武者小路自身の芸術に対する執着の表れであるようにも感じられる。

1―2　広次の小説の価値

同じ芸術の仕事とはいえ、広次は果たして小説家として成功できるのであろうか。西島は広次が自分の実体験を題材に書いた作品を読んだ後、「君は君の血や涙や君の全生活を作の内にしぼりだすことの出来る少数な人と思ひました」と評価しているが、それが彼の本音なのか、それとも広次に対する好意だけなのか、不明である。しかしたとえ、西島が広次の作品に感心しているとしても、それは広次という戦争被害者への同情に過ぎない可能性も考えられる。その上、本作品中に書かれた広次の文章を見る限りでは、書かれているのはあくまでも彼の戦争体験談だけであって、彼が本当に小説を書く才能があるのかどうかは明確には描写されていない。実際、静子の結婚話を機に西島は広次の小説を自分の雑誌に掲載したが、案の定世間からは悪い批評を受けている。さらに、静子の「兄はものになりますわね」という言葉に対して、西島は「あなたさへわきに居れば」という曖昧な回答を返しており、広次が小説家としての才能を有しているかということには大きな疑問がある。

世間から批判され続けた時期を経て、ようやく現在のような一人前の作家になった西島は、広次のことを「何時になつたら原稿でくらせるやうになるかわからない」と言いながらも、広次の小説家になる夢を応援し続ける。一方、広次自身も自分の小説家としての才能に自信を持つことができず、不安を感じているが、妹は兄の作品を「いいものだと思いますわ」と言い続け、兄に自信と勇気を与えようとしている。「彼等の芸術への情熱は、全く白樺派的だ」[9]と河上徹太郎氏は解説しているが、まさにその通りであろう。

どんな困難があるにしろ、夢と希望を見失わず、理想を追求し続け、自己を肯定するべきだ、という武者小路の理念には共感できる部分も多い。しかし、「今の時代には生活の安定を得なければ自由は得られないから」という広次の言葉を借りれば、現在の広次兄妹にとって一番必要なことは「生活の安定」であろう。ところが主要登場人物全員が、広次の小説家としての夢が「生活の安定」を保証することができないと分かりつつも、ひたすらに広次の理想を応援しているのである。残酷な現実を直視しようとせず、ただ一心に芸術の夢だけを追求しようとする広次を中心とした登場人物の理想的な姿には、どうしても現実性を欠いているという感じを受けざるを得ない。

2　西島について

西島は広次を訪ねた時に、偶然静子の結婚話を聞き、広次兄妹の境遇に同情を禁じ得なかった。

僕が偶然行つてゐる時にこの話が起つたのだらう。それは野村の運命に僕が手をさへなければならないからではないかと思つたのだ。（第二幕）

広次の不幸な境遇を見て、より恵まれた環境にいることを自覚した西島は、自らも兄から毎月五十円もらって生活しているにもかかわらず、広次兄妹に叔父の家を出ることを勧め、兄妹に金銭の援助をすることを決意するのである。西島が他人に思いやりがあり、正義感を持った人間として描かれていることには異論はないであろう。しかし、西島はただ広次兄妹に同情するだけに止まらず、その同情心はいつのまにか静子を恋する気持ちに変わってしまったのである。

しかも、西島にはそもそも広次兄妹を抱え込むだけの余裕がなかったため、次第に金を得る道がなくなり、ついには蔵書を売るしか方法がなくなってしまう。それでも、静子に対する愛情が手伝っているのだろうか、彼は高峯からの、画が売れたら半分を広次に送りたいという申し出に対して、「金の心配は自分一人だけでしたいとさへ思つてゐる」と答えている。妻の芳子は夫がそこまで骨折って広次兄妹を助けようとすることが納得できず、「かゞやくやうに美し」い静子がライバルのように見え、夫に不信感を感じるようになり、夫婦の間にはついに隙間が生じてしまうのである。

大津山氏は、西島が兄から援助を受けていることは「当時の作者自身の状況とほぼかさなりあう」[10]と言っている。そして、西島がなぜ広次兄妹を援助するのかについて、前述の広次に対する同情と静子に対する愛情以外に最も大きな理由として、「広次と西島が未能力者の仲間であった」からだという解釈を示している。つまり、西島には他人の面倒を見る力がなくても、広次とは「未能力者の仲間」であるからこそ、広次に対する連帯感（大津山氏は「未能力者の連帯とは、共倒れをも辞さない無垢の連帯のことであった」と述べている）を感じ、共倒れの恐れがあることをもかえりみず、広次兄妹に無条件に援助をするというのである。「未能力者」という言葉は武者小路自身の言葉である。[11]

しかし、その意味はともかくとして、現実的な観点に立てば、西島が家庭を崩壊させてまで広次兄妹を援助しようとする気持ちを有しているようには、この作品は書かれていないと思われる。なぜなら、西島は広次兄妹を援助する力が次第になくなっていく際に、静子の犠牲を密かに望んでいると告白しており、この渦中から身を引こうとしているようにも思われ、実際に共倒れはせず中途半端な立場に立ってしまうからである。また、西島は静子に恋していると告白するものの、作中においてその恋愛感情が明確にされていないことも見逃せない。冷静に広次兄妹を見守って、自分の能力の許す範囲内でのみ彼らを助けようとする高峯に比べて、このような西島の行動には十分な必然性が描き込まれておらず、彼は作者のある種の理想像として描写されている傾向が強過ぎると言えるのではないだろうか。

3　静子について

静子は叔母から三郎との縁談を勧められた際に、兄の仕事を手助けしなければならないのを理由に断っている。事実、広次は盲目の字は習う気がしないと言っており、妹に本を読んでもらったり、筆記してもらったりして完全に頼り切っている状態なので、西島の言う通り、兄にとって彼女は「目であり、杖であり、唯一の相談相手」である。広次の為に結婚話を拒否した静子だが、兄がいなければ自分「一人さへハイと云へば」いいとも思っているため、そもそも縁談を断固として拒絶するつもりはないようにも見える。だが、広次と西島が強く、相川や叔父夫婦を非難し、結婚を断じて承知すべきではないと主張するのを受けて、静子はただ大人しく兄の意思に従っている。そしてやむを得ずに西島の援助を受け取ったのである。しかし、静子は表面上は衆人の反対に従順であるかのように見えるが、実際には自分のことを能動的に禍を払う「橘姫」にもたとえており、いざとなると兄たちの意見に反発し、縁談を承知する可能性のあることも忘れてはならないと思われる。

自分たち兄妹のために力を尽くしてくれる西島に対し、彼女は感謝の気持ちでいっぱいになっているのであろう。また、味方になってくれる西島の脇にいると、静子は「気が落着」くと言い、彼と会う度に彼女の情意が仄めかされているとも思われるので、彼女も徐々に西島に好意を感じるようになっているものと思われる。ただ注意すべきは、彼女は決して西島の家庭に立ち入るつもりはないし、西島が自分たちの不幸に巻き込まれることを望んではいないことである。従って、静子は西島を訪ねた時に、彼が蔵書を売っていることを知り、さらに西島に接吻されようとしたことに驚いて、ついに三郎の妻になることを決意するのである。

「僕も野村も今に自分を生かす為には犠牲者を要求するのだ。それは二人の女の内の誰かだ。僕の妻か。野村の妹かだ。さうしてそのことを野村の妹は感じてゐたのだ。」という西島の気持ちに答えるかのように、静子は自ら結婚の道を選んだ。彼女は最初は兄のために縁談を断っており、最後になっても兄や西島の窮地を考え、さらに叔父一家の繁栄をも顧慮するなど、終始他人のために行動し、自分のための欲求をまったく考えていない献身的な人物として造型されている。一方、上述した西島の「僕も野村も今に自分を生かす為には犠牲者を要求する」という言葉からも分かるように、彼等も心のどこかでは静子の犠牲を密かに望んでいた可能性も考えられる。もちろん、彼等の心の中でも激しい葛藤が生じており、そのジレンマについては考慮する必要があるであろう。しかし、このような従順で献身的な妹はまさに広次や西島、さらには作者自身によって理想化された女性像なのではないだろうか。こうした女性像はあまりにも主観的かつ理想的であるように思われるのである。

三　作品の深層における女性差別意識

沼沢和子氏は広次や西島などの男性登場人物の発言に対して、次のように記している。

「相川の妻になるよりは売淫婦になる方がいい」「いやな奴の妻になるよりは妾になる方がいい。芸者、女郎、プロスティチュート、それでも相川の妻になるよりはいい」という西島や広次の言葉は、女性ならとてもいえないむごい言葉だ。[12]

こういった西島や広次の発言には、道楽者と言われる三郎の妻になる価値が少しもないということを強調したい意図があることはよく理解できよう。しかし当時の男女不平等の社会背景は別としても、こういう職業差別或いは女性差別のような台詞を、「万民平等」[13]を提唱する武者小路が男性の登場人物に言わせる意識には、非常に納得し難いものがある。そもそも周囲の人が結婚に反対している最も具体的な理由は、妹がいなくなれば広次が不自由になってしまうという点なのである。

「だけど俺がゐる。俺の仕事がある。承知してはいけないよ」や、「今お前がゐなくなつたら俺の希望は消えてしまうよ」などといった広次の言葉には、妹の幸せを考えるよりも、自分自身のことばかりを気にしているような発言が多い。もちろん、妹の自分にとっての重要性を強調することが、静子に縁談を諦めさせる一つの有効な方法であることは確かであろう。しかし傍観者の西島でさえ「野村だつて今妹を奪はれるのはどんなに苦しいか知れやしない。妹がゐればこそ仕事が出来るのだから」と言っており、広次とまったく同じ発想だと思われる。仮に広次に妹がいなくなれば、彼は次第に独立できるように訓練していくことになるであろう。西島の妻芳子の「妹さんはお気の毒ですわ」という一言だけでも、上述した広次や西島の発言よりは静子自身を気遣う言葉として、その価値は大きいと言えるのではないか。

また、広次は妹が相川家で体格検査をされ、風呂を覗かれるという策略にかかった侮辱話を聞いた後、静子が受けた衝撃を少しも慰めようとせず、ただ「馬鹿！　馬鹿！　お前は恥知らずだ」とひたすら妹の不注意を非難している。そして、西島の援助を求めるため、静子の「あのことは、だまつてゐて」との要求を無視し、妹の立場を少しも顧慮せず、衆人の前で暴露してしまったのである。そのため、静子が再び傷ついたことも確かであろう。

「俺は男だ」、「俺も男だ」と広次は繰り返し叫んでいる。そして、「いくら盲目になつたつて、野村は男だからね」と西島も述べているように、男性である広次のプライドばかりが強調されている。「僕はあの妹を相川にやるのは不服なのだ」などといった西島の発言にも、男性的なプライドが感じられる。それに対して、女性としての静子の尊厳は少しも重視されていない。最後に、静子が犠牲となることを決意した後に語る言葉は最も重要な部分だと思われるので、以下に引用しておく。

私のしたことは恥知らずですわ。私、往来を歩くのでも小さくなつてゐましたわ。私程賤しい女はないやうな気がしましたわ。（中略）私お兄さんの傲をきづつけることを思ふとたまりませんわ。私が一人賤しいのですわ。（中略）私のしたことはどんな女だつて恥ぢますわ。ですけれど私は悲しくはありませんの。私は生き

てゐてお兄さんの仕事を見ることが出来るのですもの。（第五幕）

兄を納得させるため、また兄のプライドを傷つけないために、静子は、家族のために一身を犠牲にしたという、むしろ美談とさえされるべきこの献身的な行為を、敢えて自ら貶めようとしている。もしこのように悲惨な献身的行為が、妹にとっての「自己を生かす」ことであるというのであれば、それはあまりにも極端なものであると言わなければならないであろう。女性としての尊厳は言うまでもなく、人間としての基本的な尊厳さえも描かれていないように感じられる静子の姿から考えると、武者小路の「万民平等」という主義、また彼の女性意識には疑問を感じざるを得ない。

織田元子氏はジーン・ベーカー・ミラーの女性心理学を援用し、フェミニズム批評に関して次のように指摘する。

彼女は女性の心理的特性の大部分は、彼女たちが社会的に劣位にあることからくると見なし、それゆえ、女性心理学の大部分は「支配／従属」の心理学になることを示唆する。支配／従属関係においては、優位者は劣位者に対して自分たちとは違った独特の美徳を要求する。女の美徳とされる従順さ、謙虚さ、優しさ、自己犠牲精神などがそれである。また、優位者は、自らの内に認めたくないような性質は劣位者に投影し、劣位者の内にそれらを見る。女の非合理性、感情性、弱さ、依存性、劣等性などがそうである。[14]

広次の「俺の自由もお前（静子―引用者注）の自由も俺の仕事の成功するかしないかできまる」などの発言から、まさしく彼は優位者として造型されていると言えよう。それに対して、静子は「今にお兄さんの仕事は私を幸福にして下さると思ひますわ」、「私の希望は皆、お兄さんが一人で背負つて下さるのですもの」と言っており、劣位者の「弱さ」「依存性」などの特性を持つ、自己を犠牲にした古風で優しい従順な女性として造型されている。（ここにも、男性は外で働くものであり、女性は家を守るものであるという性別役割分業的な不合理性の要素が含まれている。）そして、もう一つ注目したいのは、西島の妻芳子のことである。というのも、西島の正義感を持つ人物像とは対照的に、妻の芳子は嫉妬深く、感情的で、冷静さを欠いた非合理的な人物像として描かれているという印象が強いからである。これらの性差に関する異なった描写法から、「自己を生かす」ことや「万民平等」という主義を提唱する武者小路の進歩的なイメージとは裏腹に、実は性差に固執する意識が潜在していることを見て取れる。その意味では、世の中の不平等を打破するため、合理性と平等性を築く社会として「新しき村」を作る武者小路は、この段階ではまだ、女性を男性と対等に扱うことができていないと考えられるのである。

おわりに

以上のように分析した結果、次のようなことが明らかになった。本作品における状況設定は武者小路にしてみれば、客観的に描かれていて、先行研究が言うようにリアリティーに富んでいると言えるが、しかし一方で、主要登場人物の設定に関しては、たとえば広次が芸術

の道に執着していることは、ドラマとしての必然性を逸脱した作者自身の芸術への拘りだと言えるし、また西島や静子が作者の理想像として主観的に造型されていて、客観性を欠いていることも分かる。しかも、主要登場人物の全員がほぼ同様の思想傾向を持っているように描かれているため、本作品の登場人物は極めて偏った傾向を示しているようにも感じられる。

そもそも作品中において、相川や叔父夫婦に関しては、主要登場人物たちが彼等の人物像について語っているだけであるため、彼等は確かに悪人のようにも見える。だがその反面、静子の発言によると、相川から縁談が来た時に、叔父は本人に聞いてみると言ったらしく、彼女を尊重しているかのようにも感じられる。また、静子は叔父が免職になることに同情しており、「本当にいゝ方なのですもの」と言ったり、広次が叔父の子供のやんちゃを責めた時にも「それでも子供が二人よれば仕方がありませんわ。悪気ぢやないのですもの」と言ったりしており、叔父一家が皆悪人であるかどうかには疑問も感じられる。作者は彼等を実際に登場させてはいないし、彼等の姿についても具体的には全く語っていないため、読者のわれわれは彼等を客観的に判断することができないのである。

寺沢浩樹氏は本作品における作者の意図を「人間どんなに苦しくも生きようとするその力」の表現にあったとし、『その妹』の悲劇性が広次の自我伸張の表現、すなわち生命力の表現のために用意されたものだと考えているが、広次が自己の無力さを認めざるを得ないため、『その妹』の生命力表現は変容せざるを得なかった、と指摘している。そして、続けて次のように述べている。

「その妹」の悲劇としての価値が高いのは、その根底に「自己を生かす」哲学が確固として存在しているためにほかならない。ただそれが素直に生命力としては表現されず、その変容によって悲劇という表現の形を得たに過ぎないと考えるべきであろう。(15)

確かに、武者小路は「自己を生かす」ことを主張しており、作品の登場人物においても、作中において「自己を生かす」意欲を強く感じ取ることができる。しかし、本作品においては、結果的に見ると、登場人物の誰一人として完全に「自己を生かす」ことができたとは言えない。ただ、登場人物たちには悪化した状況の中でも、希望を求め、強く生きようとする力が感じられるため、本作品は寺沢氏が指摘した通り、「自己を生かす」形が変容したものとして見ることも可能であろう。作者は本作品を通して弱小な人間がどんなに苦しくとも生き抜こうとする姿勢を描写し、それによって新たな「自己を生かす」の定義を提起しようとしているのかもしれない。

また、本多秋五氏は武者小路の思想には、「自己を生かす」いわゆる「個人主義」の極と、他人の「自己を生かす」ことをも尊重する隣人愛の極とがあると言い、こう語っている。

武者小路自身においては、両極はひとしく「自己を生かす」によって統一されており、彼の気持では、自己犠牲は自分を殺すもの

ではなく、「自己を生かす」ひとつの手段にすぎない。[16]

しかし、もし静子の献身が「自己を生かす」の定義と一致するのであれば、これは「あまりにも悲劇的な妹の肯定面」[17]になってしまうのではないか。これは静子の犠牲が作者の理想或いは主観による「自己を生かす」結果であるものと理解せざるを得ないであろう。しかも彼女の犠牲は広次にとって、また西島にとっても、悪化した事態が好転する見込みを少しも保証してはいないため、作者の主観的意識はより一層明確なものとなっていると言えるのではないだろうか。劇は妹の犠牲によって幕を閉じ、また広次や西島らの理想が具体的に試されるような出来事も描かれていないため、彼らの理想は果たして苛酷な現実に耐えられるのかということも明らかにはされていない。つまり、本作品における静子の犠牲という設定には、男性や家族の犠牲として生きる滅私奉公型の女性を模範とする封建的家父長制的考え方が無意識に示されていると思われるが、こういった考え方は作者の「思想」とは相反するものであり、そのことを武者小路が意識化できていないことを見逃すべきではないであろう。

本作品から窺える女性差別意識を出発点として、従来の研究では等閑視されている武者小路文学におけるジェンダーの問題を明らかにすることが筆者の今後の課題である。

テキストの引用は、小学館版『武者小路実篤全集第二巻』（昭和六十三年二月）による。

注

（1）関口弥重吉「解題」（『武者小路実篤全集第二巻』小学館、昭和六十三年二月）による。

（2）武者小路実篤「後書き」（『武者小路実篤全集第十五巻』新潮社、昭和三十年十一月）、引用は『武者小路実篤全集第十八巻』（小学館、平成三年四月）による。

（3）寺沢浩樹「武者小路実篤「その妹」という戯曲とその上演」（『文教大学文学部紀要』平成十年一月）による。武者小路の戯曲の上演記録としては、『その妹』が十四回、『愛慾』が十回、『だるま』が七回、『或る日の一休』『或る日の素盞嗚尊』『三和尚』『桃源にて』がそれぞれ六回、『二つの心』が五回と続くという。

（4）『改造』（大正十年七月～十二年十一月）。引用は『武者小路実篤全集第五巻』（小学館、昭和六十三年八月）による。

（5）大津山国夫氏の「『その妹』の構造」（『武者小路実篤論―「新しき村」まで―』東京大学出版会、昭和四十九年六月）では、「二人の未能力者」とする広次と西島を中心に見ており、「リアルな状況設定のなかで無垢なヒューマニズムが横溢しており、両者の芸術的均衡に成功した作者の手腕を」高く評価したいという結論に至っている。また、寺沢浩樹氏は「『その妹』の悲劇性――生命力表現の変容――」（『日本文芸論叢』昭和五十九年三月）において、作者の創作意図に沿って、「会話を主体としてその「感情」を十全に「生かす」ことができる戯曲様式において、きわめてリアリスティックで完全な一つの劇を創作し得たということは、高く評価されねばならない」という結論を下した。

（6）大津山氏前掲論文

（7）たとえば、第一次世界大戦の最中に書かれた『ある青年の夢』（大正五年）。他に、『未能力者の仲間』（大正四年）、『悪夢』（大正四年）などがある。

（8）引用は『武者小路実篤全集第一巻』（小学館、昭和六十二年十二月）による。

（9）河上徹太郎「解説」（『日本文学全集13武者小路実篤集』河出書房、

昭和四十年十月）

(10) 大津山氏前掲論文

(11) この言葉について小学館版『武者小路実篤全集第二巻』の「解題」（関口弥重吉）には、「「未能力者」とは「よきことをしたいと云ふ意志を感じながら、その力のない」「他人や自己の運命に就ての未能力者」（『向日葵』あとがき）のことで、作者の造語である」と書かれている。

(12) 沼沢和子「『その妹』」（『国文学解釈と鑑賞』平成十一年二月）

(13) 大津山国夫氏によれば、武者小路の新しき村（大正七年）の提唱には、次のような三つの願いが込められていた。一、階級と搾取のない、万民平等の理想国家の建設。二、共生農園の創造。自愛と他愛、自立と連帯、文化と労働、などの調和した、共産の友愛社会をつくろうとした。三、武者小路個人の生活改造。（大津山国夫『武者小路実篤研究―実篤と新しき村―』明治書院、平成九年十月）

(14) 織田元子『フェミニズム批評―理論化をめざして』（勁草書房、昭和六十三年一月）

(15) 寺沢氏前掲論文

(16) 本多秋五「『白樺』と人道主義」（『日本文学講座Ⅵ 近代の文学後期』河出書房、昭和二十五年十二月）。引用は『本多秋五全集第三巻』（菁柿堂、平成六年十一月）による。

(17) 松本武夫・福田清人「戯曲『その妹』」（『武者小路実篤　人と作品』清水書院、昭和四十四年六月）

（よう・しゅうび、広島大学大学院博士課程後期在学）